天瀬町の石造美術

――豊後中川から草三郎へ――

内恵　克彦

〈一〉

日田郡天瀬町大字馬原草三郎は、玖珠郡玖珠町萩ケ原から山一つ越えた谷間にある地区で、豊後中川からでも山中にかなり奥へ入り込んだ所である。この草三郎地区への入口の峠の所に、寺ケ迫廃寺跡と呼ばれている所があり、この囲りに南北朝時代を中心に室町・江戸時代の石造物が残されている。天瀬町での調査は私自信まだ入口にさしかかった程度であるから、現時点で石造物について云々することは出来ないが、その数は比較的少ないように思える。その天瀬町の中にあって、この草三郎付近にはすばらしい石造物が、集約されている感じがする。今後は古文書やその他の遺物を検討しながら、その上でこれら石造物の造立の意味など考える心要があるだろう。今回は豊後中川から金ケ塔・草三郎への谷筋に残された石造物を見て歩き、その一部を紹介する。今後の研究の一助になればと思います。

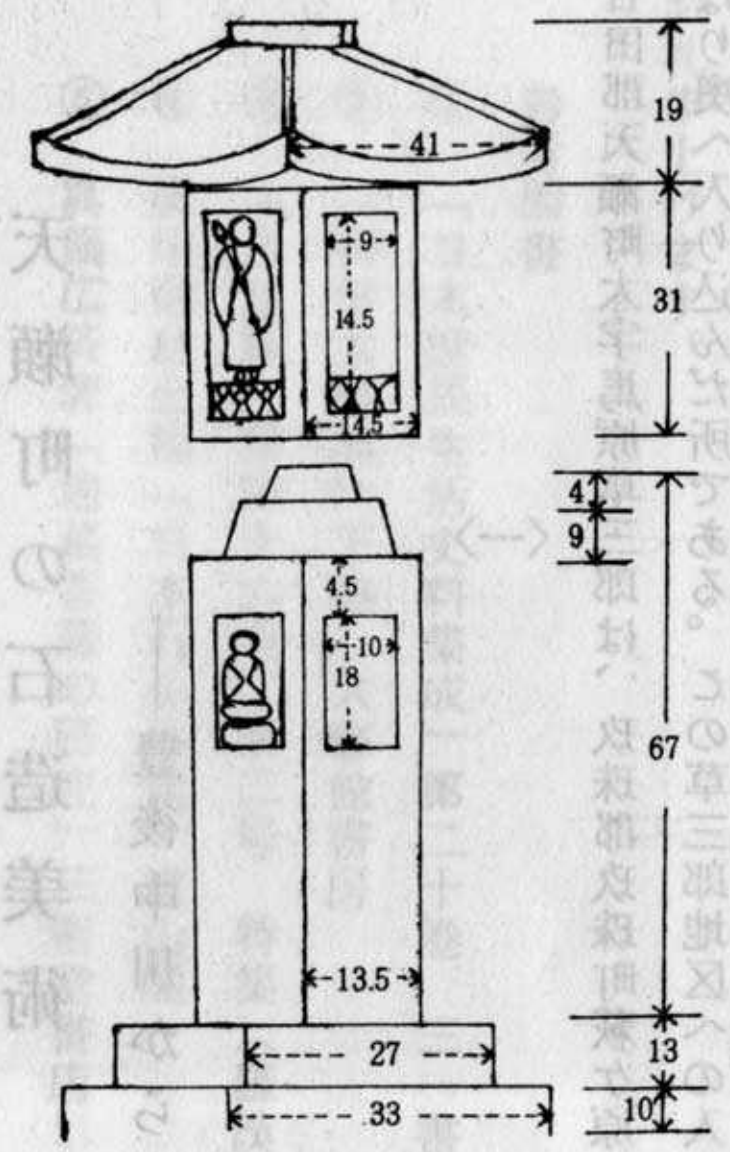
〈二〉

草三郎は江戸時代には日田・玖珠・府内の往還路よりは、はずれた位置にある地区であった。住還路は玖珠町戸畑平川―代太郎村―藪村―大石峠―求来野村―中城村となったが、文政六年（一八二三）に、平川―萩ケ原―草三郎―高釣―矢瀬―井嶽―玖珠川―上井手村―田島村―中城村の新道が開通し、注①人々の往来も盛んとなった。

馬原村の庄屋は穴井氏で延享二年（一七四五）には庄屋六郎右衛門が、農民の窮状を見かねて幕府へ直訴した。これが幕府の認める所になり、当時の代官岡田庄太夫は交替させられる事になるが、日田に帰った穴井六郎右衛門、馬原村組頭で共に江戸に行った飯田惣次他一名は捕えられ、斬罪に処せられた。

この穴井氏は玖珠郡清原氏の出身と言われる。②飯田氏については、系図や古文書など未調査なので確証はつかみえないが、やはり玖珠の清原飯田氏出身ではないかと思われる。草三郎には現在も飯田氏（当地ではイイダと読み、玖珠ではハンダ読みが多いようである）を名乗る家が数軒ある。

ではこの両氏が、この地区に移住したのはいつの頃であろうか。江戸時代に一村の庄屋・組頭を務める位の家柄であるから、おそらく中世から続く名家であったのではなかろうか。しかしこれ以上の詳細は、今の所調査不足でわからない。これは今後の研究課題としたい。



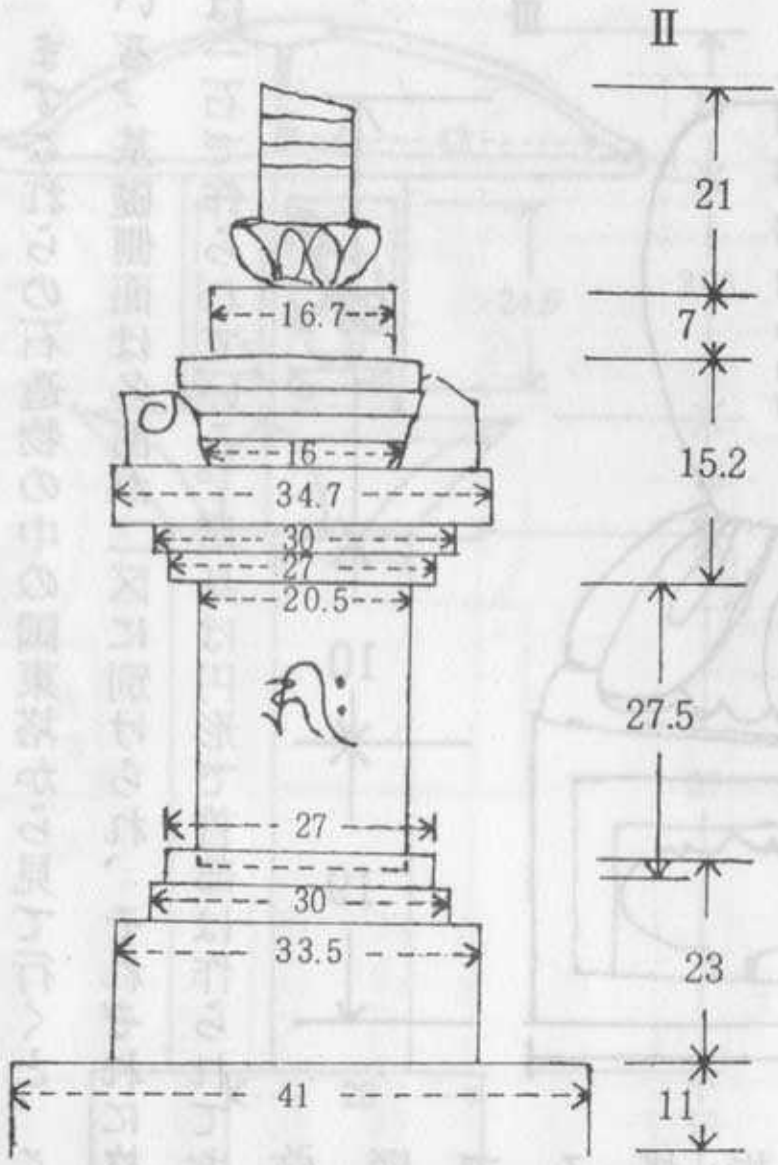
〈三〉

次にこの地区の石造物を見て行くことにする。馬原金ケ塔地区のお太師様（おだいっさま）のお堂の前に高さ一米、横三米位の石積の台を作り、その上に三基の石造物が置かれており、右から六地蔵石幢の幢身、中央の龕部と笠、その横には宝篋印塔がある。

この三基の中で左端にある幢身と中央の龕部は、もとは同じ塔であったと考えられるが、おしい事に中台は紛失しているのである。この石幢はすべてが平面六角造りで、基礎は二

段からなり、幢身には二面上部に宝珠をもつ姿と、合掌姿の地蔵の坐像が四角の龕に半肉彫りされている。上部には円形の枘が二段に作り出されている。しかしこれは中台が紛失しているので、二段とも枘かどうかはわからない。ただ玖珠郡内では見られない形なので、なんともいえない。龕部の六体の地蔵は、像もしっかりしておりなかなかの好塔である。笠は波屋根で、裏には垂木が刻出されている。屋根には峰立がわずかながら作られている。宝珠は後補ではないかと思われる。全体的に見て、室町末期から安土桃山時代頃の造立ではないだろうか。残存総高は一・四米になる（図Ⅰ参照）

同じ場所の右横にある宝篋印塔は、基礎二重で、一重目は後補と思われる。二重目上部には二段の段階がもうけられ、中は彫り込みを作り、塔身と咬合うように作られている。側面には格狭間などは彫られていない。塔身は全体のバランスから見て少し背が高く、中央部四方には、バイ（薬師）、タラーク（宝生）、キリーク（弥陀）、アク（不空成就）の四方仏の梵字が刻まれている。これは金剛界四仏に近い表し方と思われるが、普通密教の金剛界四仏では、東の薬師如来の所は阿閦如来が表されるのであるが、この塔の梵字はどういう意味からであろうか。笠は下部に二段、上部に四段の段階を作り出し、隅飾突起はほぼ垂直に立っており、渦巻紋が刻まれている。露盤は少し普通より大きく高い。相輪は下部に請花を有し、九輪は三輪目から上は折れて紛失している。残存総高は約一米、造立年代は梵字の彫り、笠などから見て室町時代末期頃ではないかと思われる（図Ⅱ参照）

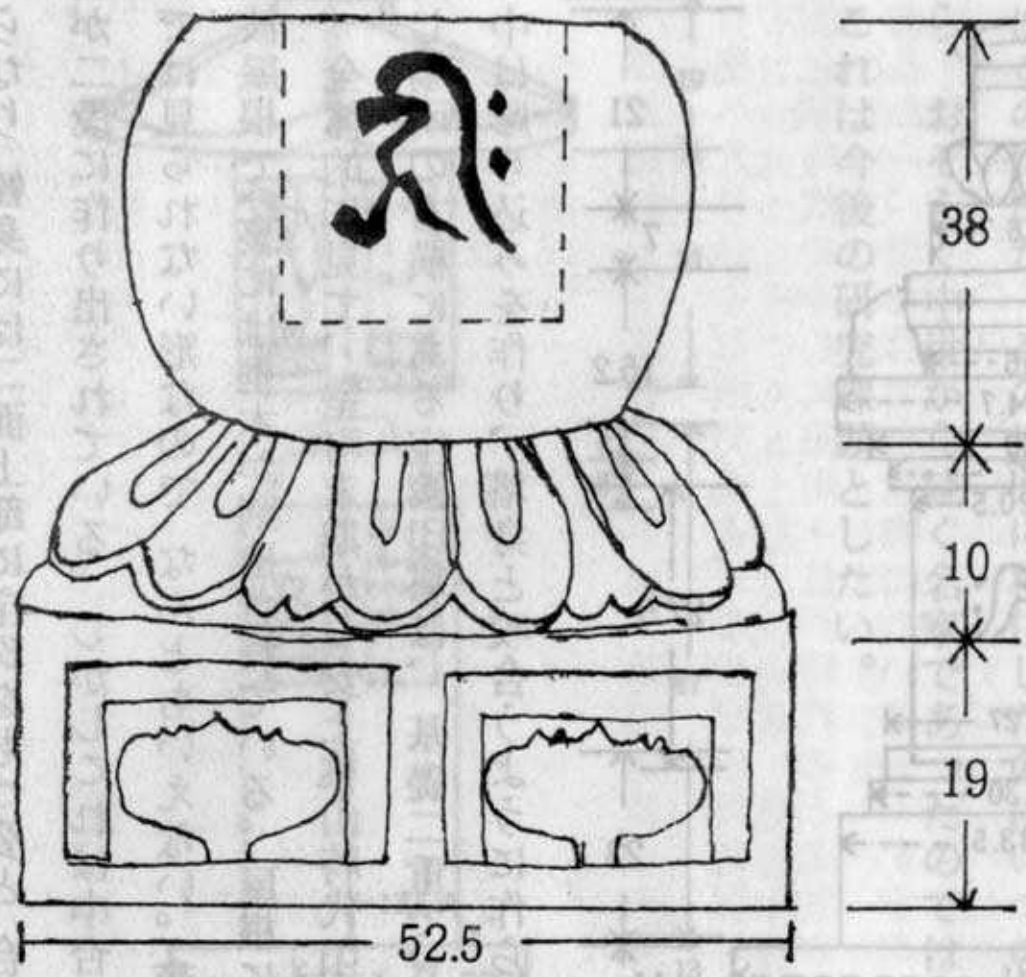


この金ケ塔地区からさらに奥へはいった、峠の下り坂の途中に寺ケ迫廃寺跡がある。ここに数十基分の石造物の各部分が残されており、中にはお堂の基礎石に転用されているものもある。その造立年代も南北朝時代の国東塔、室町時代

の五輪塔・一石五輪塔、江戸時代のものと思われる六地蔵石幢などが見られる。この中で五輪塔は一石五輪一基をのぞいては、整ったものがないので説明は省略するが、中には笠・塔身に南北朝時代を思わせるような立派な五大四方門の梵字が刻まれたものも見受けられる。

まずこれらの石造物の中の国東塔から見て行くと、この塔は、基礎が一石と塔身のみ残されて、他の部分は紛失している。基礎側面は各面が二区に別けられ、それぞれに格狭間が彫られている。台座は反り花のみの複弁八葉で、基礎とは一石で作られている。塔身は円形で首部は作られておらず、中央四方にはバク(釈迦)・不明・サ(観音)・キリーク(弥陀)の四方仏の梵字が薬研彫りされている。この梵字の表し方は顕教の四方仏のに近い。不明部分は石の表面が剝離しているためであるが、バイ(薬師)であろう。いわゆる国東方面によく見られるという、三如来一観音形式の梵字の表し方である。[3] そしてこの塔の格狭間・反り花の彫りを見ると、九重町下辻異形国東塔(県指定有形文化財)に非常によく似ている。また塔身の首部のない形などから見て、あるいはこの塔も異形国東塔ではないだろうか。笠と宝珠(あるいは相輪カ)の紛失がおしまれる。なお塔身には上部より納経孔がほられており、梵字不明部分(塔身中央)に小穴が通じているが、これは後世のいたずらかなにかで出来たものと考えられる。残存総高〇・六七米になる(図Ⅲ参照)

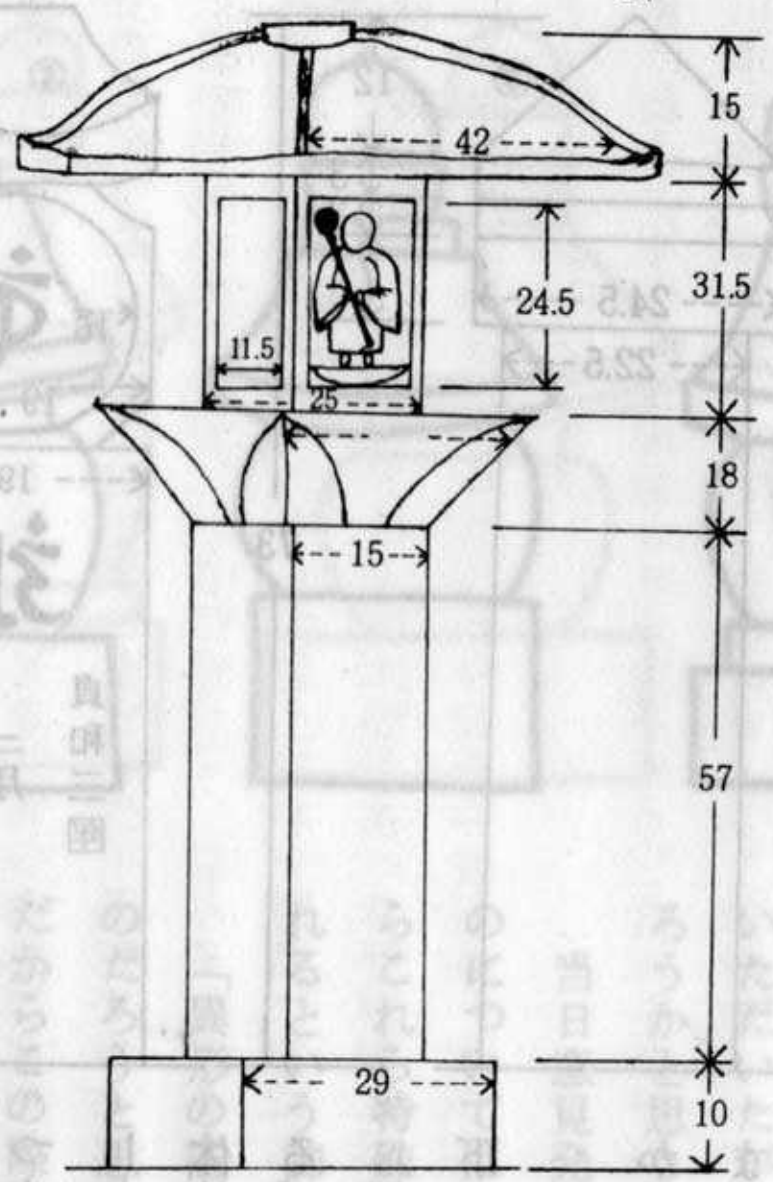
Ⅲ



先にも述べたように草三郎には飯田姓の家が数軒あるが、すべて未調査なので確証はないが、玖珠の清原飯田氏の出であろうと

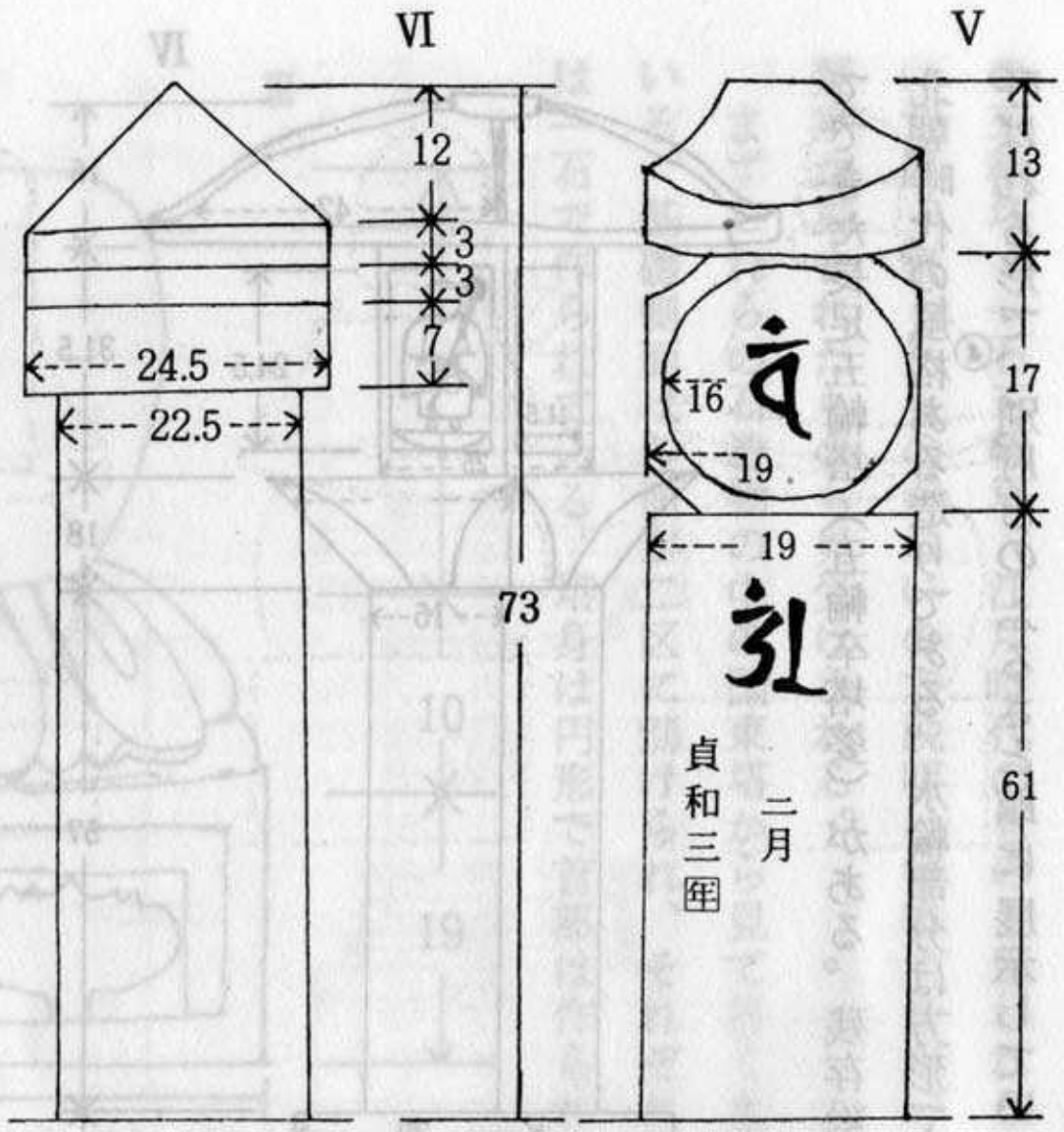
思われる。清原飯田氏の本貫地は、九重町大字松木川上（飯田）付近で、中世の飯田郷に当る。この飯田郷松木の中、飯田地名のすぐ近くに下辻があり、ここに異形国東塔がある。この両者の石造物には何らかの関連性があると感じさせるが、それはこれからの研究課題にしたい。

同じ場所に、銘文などは彫られていないが江戸時代頃の造立になるものと思われる六地蔵石幢がある。基礎一重・幢身・中台・龕部・笠とすべて六角作りで、宝珠は失っている。中台は少破しており、請花は線刻で単弁六葉が彫られている。笠は波屋根で軒下には浅く垂木を刻出し、屋根には峰立がわずかながら作り出されている。しかし笠は現在横におろされている。残存総高（笠を載せた形で）、一・三一五米である。（図Ⅳ参照）



この石幢や国東塔の周囲、又そこに建っているお堂の土台石などに五輪塔の各部分が散乱している。中には完形の小形の一石五輪塔（室町末期頃の造立カ）や、宝篋印塔の笠などもある。ここは寺名はわからないが廃寺跡と伝えられており、そこに墓地があってこれらの石塔が建立されていたものではないだろうか。

この寺ケ迫の廃寺跡の横を山上に向うと、草三郎大神宮がある。その境内に明治十年の宮地獄社の石祠が、石垣を組んだ上に建立されている。この正面の石段の登り口左に、一石でできた長足五輪塔（五輪卒塔婆）がある。残存総高〇・九米、空・風輪（宝珠部分）を欠いているが、その造りは南北朝時代の風格ある造りである。水輪部分は方形で、円になるように四隅を切り落した形の、いわゆる隅切五輪塔と呼ばれる形で、④別府市のふるさと館に展示している長足五輪塔と同形である。各面には五大の四方門の梵字が薬研彫



りされている。長足の地輪部分には「貞和三□・二月」（一三四三）の銘文が陰刻されている（図V参照）。

また右側には、総高〇・七三米の角塔婆がある。頭部は山形につくり、その下には二本の線刻の切り込みが彫られ、額部の突出しもわずかながら見られる。銘文・梵字などは認められず、全体的に風化が著しい。造立年代も判定がむずかしく、不明である。

以上、二つの石造物は当初からここに造立されたものではなく、下の寺ケ迫廃寺跡にあったものを移したものだといわれる。⑤

この様にこの谷筋には、天瀬町でも他地区にくらべ南北朝時代から室町・江戸時代に至るまでの石造物が、多く残されている。また馬原本村にも貞和五年（一三四九）八月の銘をもつ国東塔の基礎と台座と相輪が残されているようであり、この地区は国東地方との関連を強く感じさせる。これらの事がこの地区の歴史を一層面白いものに感じさせるが、それは後日の研究課題としたい。（九重町大字右田三四九六）

注

① 『天瀬町史』―郷庄制から町制まで―（日田郡天瀬町役場編・昭和46）一五頁

② 『大分県人物志』（大分県教育会編纂・歴史図書社　昭和51年）五〇八頁

③ 望月友善『大分の石造美術』（木耳社　昭和50年）一九六頁

④ 日野一郎「石塔」（『新版仏教考古学講座』第三巻　塔・塔婆・雄山閣　昭和51年）四八頁

⑤ 『天瀬町の文化財』第二集（天瀬町教育委員会・昭和51年）二六頁